

特別寄稿

“中谷宇吉郎先生小伝”

名古屋大学名誉教授 樋口 敬二

(1) 出身の地・加賀

—中谷宇吉郎・雪の科学館と石川四高記念文化交流館—

1984年9月、金沢市文化ホールで、司馬遼太郎氏の講演「加賀人の形成」を聴いた後、司馬さんと話す機会があったので、私の恩師・中谷宇吉郎先生が石川県の出身であることを話した処、「そうですか、中谷さんは石川県の出身でしたか。そういわれてみると、「雪は天から送られた手紙である」という言葉は、加賀文化の伝統から生れたような気がしますな」と言われたが、中谷宇吉郎（1900.7.4～1962.4.11、以下、敬称を略す）の生地は加賀市の片山津温泉である。



中谷宇吉郎

(1955年頃の撮影
と思われる)

2012年4月11日は、宇吉郎が東京大学付属病院で亡くなってから没後50年に当たり、加賀、東京、札幌など各地で記念行事が計画されている。

石川県加賀市潮津町にある中谷宇吉郎 雪の科学館では記念の展示やシンポジウムの開催が予定されているが、同館は宇吉郎の生まれ故郷に1994年10月に開館したものである。生地の片山津は温泉地であるが、1958年に近隣八町村の合併によって加賀市の一部となった。1990年頃から、当時の矢田松太郎市長を中心にして、郷土の生んだ偉大な

科学者を記念する科学館を作る構想が生まれ、1994年に開館した。

中谷芙二子(次女)氏の厚意によって寄贈、寄託を受けた、東京の旧宅に保存されていた遺品、蔵書等の資料も含めて、「ひととなり」、「雪の結晶」、「氷の結晶」、「世界の中の宇吉郎」など五つのゾーンに分れた展示があり、一方 北大理学部地球物理学教室に保存されていた研究資料も委託によってここに保管されている。

開館に際してガイドブックとして刊行された「中谷宇吉郎 雪の物語」は宇吉郎の伝記、中谷静子夫人始め多くの人達の追想を収め、宇吉郎を理解するには最良の本であり、今でも 雪の科学館から購入できるので、読むことを勧めたい。

同書の“まえがき”に、総合監修・担当として私が書いたのだが、科学技術会議(座長・内閣総理大臣)の科学技術系人材部会では、「人々が科学者・技術者の人間像に接することができ、また、その業績の社会的意義を体感できるような記念館、歴史館が重要である」としているが、中谷宇吉郎 雪の科学館は、東近江市にある「西堀栄三郎記念 探検の殿堂」とともに、その典型であると言ってよい。

ところで、宇吉郎の生家跡に記念碑が立っている片山津温泉は、現在はすっかり都市化しているが、宇吉郎の幼少時には、「簪を挿した蛇」(岩波文庫「中谷宇吉郎随筆集」所収)に次のように書かれているとおり自然溢れる地であった。

「石川県の西のはずれ、福井県との境近くに大聖寺(だいしょうじ)という町がある。其処に錦城(きんじょう)という小学校があつて、その学校で私は六年間の小学校生活を卒えた。(中略)小学校のすぐ後は、小さい山が続いていた。錦城山という山であった。(中略)其処には、簪をさした蛇だの、両頭の蛇だのがいるという噂があつた。(中略)子供達は誰もそれを疑わなかつた。」

そして最後に「目に見えない星雲の渦巻く虚空(こくう)と、簪をさした蛇とは、私にとっては、自分の科学

の母体である。人には笑われるかもしれないが、自分だけでは、何時までもそっと胸に抱いておくつもりである。」と結ばれている。

そんな生地から「宇吉郎」という名のお酒が生まれた。片山津の中谷本家の裏山で中谷芙二子(次女)、中谷健太郎(甥)両氏が採取した土壌から分離した天然酵母を使って、愛媛県の酒造家・亀岡 徹氏が作ったのが純米大吟醸「宇吉郎」(亀岡酒造)であり、その経緯は健太郎氏が「ゆきあかり」第21号、(大聖寺文化協会、平成14(2002)年2月20日)に書いている。

そんなお酒なので、2011年10月29日に雪の科学館で第6回雪のデザイン賞の授賞式が行われた時に、選考委員の一人として出席した私は受賞者の皆さんに「祝杯を挙げる時には清酒「宇吉郎」で！」と呼びかけた。

なお宇吉郎の墓碑は加賀市の片山津と動橋の間の中島町にあり、3回忌の1965年4月11日除幕式が行われ、遺族・静子、芙二子、親しい友人・岡潔、門下生・関戸弥太郎、花島政人、孫野長治、樋口敬二らが参列した。安倍 能成筆の「中谷宇吉郎之墓」と書かれた墓石が立つ六角形の台座は芙二子氏のデザインで、六つの側面には雪の結晶が描かれている。また、墓碑銘には親友・茅 誠司の友情溢れる碑文が刻まれている。

宇吉郎の「私の履歴書」(「中谷宇吉郎集」第六巻所収、2001)にあるように、父・宇一は呉服や雑貨を売っていたが、趣味の九谷焼に熱中し、宇吉郎を小学校の後に、小松の工業学校の窯業科に入れようと考えていた。しかし、小学校卒業の直後、宇一は急に亡くなり、宇吉郎は石川県立小松中学校に進学した後、理解ある母の勧めによって金沢にあった第四高等学校(旧制・四高)を目指すが、入試に落第する。宇吉郎はその体験を「人生勉強という意味で大いに得る所があった。」とし、後に寺田寅彦に「よい体験をした」と褒められたという。

その後一年間予備校に通ったのち、四高の理科甲類に入学する。当時の旧制の高校、一高(東京)、二高(仙台)、三高(京都)、四高(金沢)、以下八高(名古屋)までがナンバー・スクールと呼ばれ、エリートコースとされていた。

寺田寅彦は五高(熊本)、私は三高の出身で、湯

川秀樹、朝永振一郎、今西錦司、西堀栄三郎といった方々を誇るべき先輩として仰いできた。

四高の旧校舎は煉瓦作りの美しい建物であり、2004年に石川近代文学館として開館し、私はその当時参観して、岩波文庫「中谷宇吉郎随筆集」の“解説”に「白壁の教室を利用したすがすがしい展示室が並んでおり、その一室に宇吉郎ゆかりの品も展示されている。」と書いたが、2008年に石川四高記念文化交流館としてリニューアルオープンして後は、宇吉郎ゆかりの常設展示はなく、特別展の際に収蔵の遺品が展示されるとのことである。

四高時代の宇吉郎は弓道部の主将を務めたり、文学や哲学書を読むという当時の高校生らしい生活を送った。夏休みには木崎湖の夏期講座に行き、朝永三十郎のカント哲学の講義を聴き、「後になって大いに役に立った」としているが、三十郎は振一郎、堀 健夫北海道大学名誉教授夫人・志津子の父である。

高校3年になると、医学及び動植物学を志向して、顕微鏡実習を修め、「菌くその虫を見た時の気味悪さと、松葉の断面を覗いた時の美しさとは、その後いつまでも印象に残っている。自然の研究は、まず自然を見ることから始めなければならないというのが、一人立ちで研究をするようになってからの私の信条であるが、この気持は高等学校時代の顕微鏡実習に、その根を引いているのかもしれない。」と「私の履歴書」に書いているが、そう言われてみると、十勝岳で雪の結晶の顕微鏡写真を撮り、それに基づいて結晶形を分類するという雪の研究の手法は鉱物学より生物学の流れに沿っているのかもしれないという気がしてくる。

その後、田辺 元「最近の自然科学」を読んで、物理学を志し、四高を卒業して、1922年、東京帝国大学理学部物学科に入学、弟・治宇二郎、母、妹とともに東京暮らしを始める。ところが、その翌年、関東大震災に遭い、苦境に陥るが、友人達の援助と激励によって学業を続け、寺田寅彦の実験指導を受けたのが機縁で、実験物理学に進むことになる。宇吉郎は「全くの偶然の機会の重り合いが、自分を物理学者にしたようなものである。」と書いているが、その最大の偶然が寅彦との出会いであり、それについては、次回に述べることにする。

筆者、樋口敬二氏紹介

1927年朝鮮府木浦で生まれ、京都市で育つ。旧制三高時代から中谷宇吉郎の「雪」を愛読。1949年中谷門下となるため、北海道大学に進み、中谷教授から親しく指導を受ける。大学では降雪現象を研究。気象学会賞受賞。1966年名古屋大学教授となり、雪氷学の広い分野に研究活動を広げ、71年日本雪氷学会賞。「ネパールヒマラヤの氷河学術調査」では指導的役割を果たし、多くの研究者を育成。1991年名古屋大学水圏科学研究所長。93年紫綬褒章受章、1993年～2005年名古屋市科学館館長。名古屋大学名誉教授。

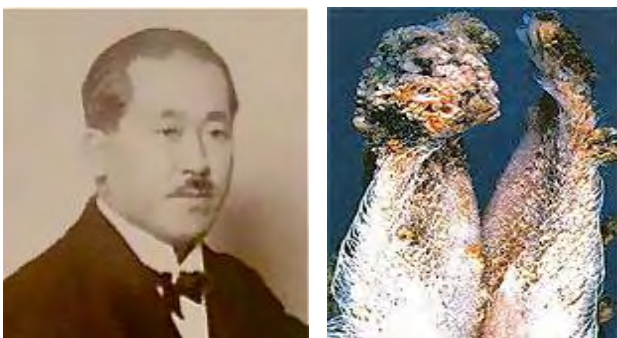
「タール癌」の話

北大名譽教授 藤田正一

2010年は北大からノーベル賞受賞者が誕生した記念すべき年であった。これをさかのぼること約100年前、後にノーベル賞に匹敵する偉業を成し遂げることになる若者が北大(当時は東北帝国大学農科大学)を卒業した。当時のノーベル賞選考委員会がもう少し賢く、柔軟であれば、彼の受賞は間違いなかったであろう。事実、彼の仕事は今日的視点から見ても、多くのノーベル賞受賞者の功績にもまして優れた研究であった。癌研究史上最重要の発見にまつわるエピソードである。

北大の前身、札幌農学校は明治40(1907)年、仙台に東北帝国大学の設置が決まると、その農科大学となった。東北帝国大学の一学部相当になったとはいえ、当初、東北帝国大学で、実際に教育が行われていたのは札幌農学校改め農科大学だけであるから、農学校が東北帝国大学設立の核となった訳である。その農科大学に畜産学科第二部と言うものがあった。今の北大獣医学部の前身である。この若者はこの畜産学科第二部で教育を受けた。

毎日毎日ベトリとした真っ黒いタールをウサギの耳に擦り込む。東京帝国大学の学生の誰もやりたがらなかった仕事であった。「癌の原因はデンマークのヒビガーが寄生虫によるものだと既に発表している。タールなんか塗ったって癌は出来っこ無い」。知を吸収することに長けた彼ら東大生たちはその頃発表された先進国の研究に疑いを挟まなかった。そこにたまたま農学校出の若者が研究に来了。「何にも知らないあいつにやらせればいい」。1913年のことである。偉業タール癌作出にまつわる逸話は農学校出身の若者に対する偏見に満ちている。



市川厚一博士とウサギの耳のタール癌

この若者こそ東大医学部の山際勝三郎教授の下に内地留学してきた北大獣医学部の前身、畜産第二部出身の市川厚一博士の若き日の姿である。彼はそのような偏見に怯まず、ドイツのウイルヒョウが

提唱し、師、山極勝三郎が継承する発癌刺激説を実証してみようと、来る日も来る日もウサギの耳にタールを塗り続けた。なぜウサギの耳か。それは、自然の状態で「ウサギの耳に癌が出来ること等聞いたことがない」からそこに癌が出来れば、偶然ではなく、処置の影響で出来たと信じてもらえるからだと言うことだ。忍耐のいる地道な仕事であった。手の皮が剥けそうになるほど擦り込まなければならなかった。東大生が誰一人やろうとしなかったつらい仕事をなぜ彼は進んでやろうとしたのだろうか。

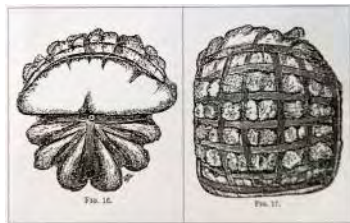
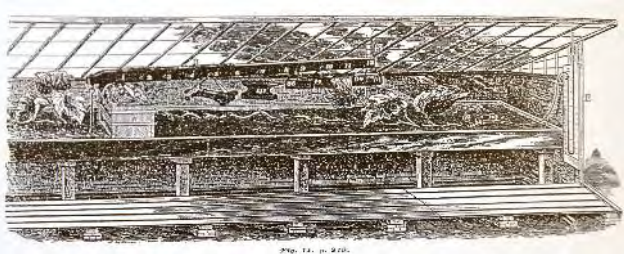
「学校の講義や書物は過去の発明に関する知識に過ぎない。学者たらんとする者は、疑問を起し、解決の道を研究し、発明進歩するを本(もと)とし、講義や書物を完全と信じてはいけない。」とさとした札幌農学校の前身、開拓使仮学校のアンチセルの教え、そしてクラーク博士のドイツ仕込みの徹底した実証主義の伝統が北大の学風の根底にある。クラーク博士が行った有名な実験がある。新芽がアスファルトを突き破るほどの力を持つ植物の樹液の浸透圧はどの位あるのだろうか。彼はなんと樹幹に水銀圧力計を埋め込み、これを計測することを考案して浸透圧を実測したのである。また、カボチャが大きくなる時、どれほどの圧に抗して成長するかを鉄製のかごの中にかぼちゃを入れ、上からおもりで圧をかけ、何キログラムまで持ち上げることが出来るかを測定した。この実験では2トンを超える圧に実験装置が壊れて終了となったが、実験後そのカボチャの根毛に至るまで根の全長を計測した。

このようなクラーク博士の地道ともいえる徹底した研究姿勢を彼の教え子らは見、手伝い、手法と精神を学んだのである。クラーク博士が札幌農学校に連れてきた米国人教師達は皆、彼の教え子であった。このような実証主義で徹底した研究姿勢は、それを体得したクラーク博士の教え子の米国人教師たちによって札幌農学校生徒たちにも伝えられたのである。

理論だけではなく、必ず実験により確証を得る実証主義、どこへでも出かけて実際に観察する現場主義(フィールドワークの重視)、後世のために標本として残す標本重視、地味な仕事もコツコツと忍耐強く行う姿勢など、北大の研究者が営々として行ってきた、労を惜しまない研究姿勢と、研究環境全体を包む自由な雰囲気はクラーク博士を始め、彼の連れてきた米国人教師たちによって植え付けられた開学当初からの伝統的な北大の学風と言えよう。

「書物に書かれていることを完全と信じるな」「実

験により確証を得よ」「労を惜しむな」札幌農学校の実証主義教育を受けた市川にとっては、研究の当然の道行きとして、進んでこれを行ったまでだ。発癌は寄生虫によると言う報告はある。しかし、細胞が化学物質により刺激を受けて癌化することもあるのではないか。疑問があれば確かめてみれば良い。市川はこれを実践した。学風の違いである。



クラーク博士のカボチャ実験装置(上)と鉄カゴからはみ出して生長したカボチャ(左)

何回かの失敗と何十日にも及ぶ作業の末、ウサギの耳に癌が出来た。実験を開始してから3年の月日が流れていた。これは世界初の人工癌の作出であった(1915年)。化学物質で癌ができることの世界で初めての証明であった。

この研究は当然ノーベル賞候補となった。が、残念ながら受賞にはいたらなかった。落選理由の一つには日本は未だアジアにおける小国で賞を受けるには時期尚早であると言うものもあったと言う。対立候補の寄生虫が癌を造るとしたデンマークのヒビガー

博士の研究にノーベル賞が授与されている(1926年)ことを考えると、当時としては市川らの仕事が如何に先進的なものであったかが理解できる。

ヒビガーの寄生虫原因説は後に否定されるが、山際と市川が示した、癌が化学物質で発生すると言うことは現在でも疑う余地のない事実である。因に、ヒビガー博士はノーベル賞受賞講演の中で山際と市川の仕事の特に取り上げ、高く評価している。

市川がタールをウサギの耳に塗り続けている時、山際教授は病床にあった。市川は師の病気に障るのではないかと気にしながら癌の発生を報告した。山際は大いに喜んで次の句をなした。「癌出来つ意気昂然と 二歩三歩」。市川の信念と努力なくしてこの偉業はなり得なかった。山際と市川の「タール癌」は実証研究のためには労を惜しまない北大の学風がなした偉業と言えよう。市川は後に母校の獣医学部に戻り病理学講座の初代教授となった。獣医学部長室には病理標本のスライドを整理する「マップ」の裏に書かれた彼の揮毫による「努力」「忍耐」の書がある。それを実践した人による書として見る人に迫る力がある。



スライドガラスの整理盆マップの裏側の和紙に揮毫された努力・忍耐の文字が彼の研究哲学を物語る。

* 本文の写真・図版はすべて「北海道大学学問の系譜」(2002年3月 北大総合博物館)からの転写です。

活動報告・他

地に足をつけて振り返る 平成遠友夜学校という学びの場

平成遠友夜学校教頭・北大法学部4年 齋藤 亮



北大教育 GP=博物館を舞台とした体験型全人教育。その一環としての平成遠友夜学校運営に、私は2年生の時出会いました。学部棟で見かけたポスターを見て「夜学校の運営を通じ何かしら身に付く様な気がする」「いろんな分野の話が聞けるのは楽しそう」というふわふわした考えで、私は

毎週火曜、遠友学舎に通うようになりました。

実際の夜学校は、思っていた以上の多様性と学びに満ちた場でした。講師は研究者や学生、弁護士や農家、写真家、企業家の方など実に多様です。その講義は分野が多岐に及ぶことはもちろん、アカデミックな話に止まらず、社会実務の生の現実にまで及ぶもので、強い刺激と深い問いかけを与えられました。

また初めて夜学校に来た時は「若い生徒がいない…」と驚きましたが、長い人生経験を経てもなお、新たな学びを求めて毎週熱心に聴講する生徒さん方の姿勢を見て、私たち学生以上の「知のフロンティア

を広げようとする ambition」を感じ背筋が伸びる思いでした。この「生涯探究」という姿勢は、私の指標の一つとなりました。

夜学校での講義、講師の方や、私にとっては人生の大先輩で先生と言える生徒さん方との交流、交わした会話を通し、自身の知のフロンティアが広がったとともに、まだまだ未知の宇宙は広く、自分の姿勢次第で学びは無限に広がっていくと感じました。

その平成遠友夜学校の教頭として、私が担った主要な役割は、講義して下さる方を探し、講義依頼をして内容や日程を調整することです。

講師は、教頭や生徒さんの人伝やリクエストがあった方だけでなく、新聞で記事になっていた方や、講義してほしいホットピックから探して行き着いた方に、飛び込みの依頼を行って引き受けて頂いたことも多くありました。ですから、常にアンテナを張っておくことと、見ず知らずの人間からものを頼まれる方の立場になって、事情が伝わるように正確で不足のない、また信頼して頂けるよう誠意を持った細やかな対応を心掛けていました。講師の方とのやり取りは主にメールや電話、時に直接お会いして行っていますが、依頼する際はどのようなケースでも「当方は何者で、何を目指して何をお願いしたいのか」を整理した文書を用意して臨み、行き違いのないように交渉・調整の記録を残していきました。それでも、日程調整の行き違いや、機材に関する要望をこちらが理解できていなかった、といった事態もあり、お互いの意向と認識を調整・共有することの難しさを実感し、反省と工夫を繰り返していました。

これは、生徒さんからの要望への対応についても言えることでした。例えば、講義時間の長短も、もっと聴きたいという意向と、交通機関の都合という事情など様々な考慮要素があります。それをどう調整し、ルールをどう共有するか教頭同士で話し合い、原則的な時間配分を決めた上で、司会の裁量的な進行を通じて実現していくという対応を図りました。

また、このように協力して運営していた教頭が、卒業により来年度は1名しか残らないという状態だったので、新渡戸稲造が開いた遠友夜学校、その理念を受け継いだ伝統ある平成遠友夜学校を途絶えさせないために、新しい担い手を募る必要がありました。

そこで、かつて私が興味を持ったような、夜学校とその運営を紹介する資料を作り、そもそもこのような活動に関心が高そうな学生が集まる北大ボランティア室に置かせて頂き、同室のイベント・ボラカフェにおいて、夜学校の紹介と運営参加を呼びかけました。その成果か、今年度から新たな教頭が加わってくれました。

この教頭勧誘が効果を上げられたのは、呼びかけに応えてくれた意欲ある人材との出会いが全てです。ただそのような出会いに繋がったのは、そのような人たちがいそうな場所を想定し、呼びかけの相手の立場を意識したアプローチをしたことと、何より問題に気付いた時点ですぐさま実際に動いたことが大きかったでしょう。ここから、問題に対処する上での想像力の重要性と、行動することがもたらすもの大きさ、そしてコミュニケーションにおいて「相手」を意識することが不可欠であることを強く実感しました。

私が、2年前にふわふわした考えで足を踏み入れた遠友学舎の学びの場。今ではその場で学び、経験・実体験として得られたことを、地に足をつけて振り返ることができます。関わったすべての方々感謝するとともに。

そして、より多くの方に、学生や若い方にも、この魅力的で有意義な学びの場へお越し頂きたいと強く思っています。また、来年度以降を担う教頭の皆さんには、来て下さる生徒さんと平成遠友夜学校での学びを繋ぐ「学びへの架け橋たらん」という ambition をもって運営し、誰もが気軽に足を運べる場にして欲しいと切に願います。

談話会報告

第22回談話会「チェンバロとバロックトランペット・声楽の夕べ」

図書ボランティア 安田 正

第22回談話会は、表題のもとに、去る1月27日(金)、15:00から約1時間にわたり、博物館1階「知の交流コーナー」で行われた。チェンバログループの方々の演奏の鑑賞会である。

チェンバロ:新妻美紀さん、野村さおりさん
バロックトランペット:内藤由美子さん
声楽:谷川千佳子さん

の4名の方々が、チェンバロ独奏、チェンバロと声楽、チェンバロとトランペットそして最後には3者の合奏と多彩な組み合わせで、10曲を約1時間にわたり演奏された。各曲の演奏前には、その曲についての簡単な紹介・解説があった。また、バロックトランペットという、一般には珍しい楽器を演奏する内藤さんの楽器の構造についての説明とその原理を応用した

塩ビ管と漏斗(じょうご)、マウスピースを繋いだ「楽器」の実験的な演奏もあり、楽しい演奏会となった。談話会(鑑賞会)は、「知の交流コーナー」を利用させてもらう関係もあり、博物館の開館時間中に設定し、一般の方々も一緒に鑑賞していただけるようにした。約 30 名の方々が鑑賞した。

談話会(鑑賞会)に引き続き、場所をボランティア控室に移し、新年会を行った。上記4名の演奏者を交え、約 15 名の参加者があり、楽しいひと時を過ごした。

私事で言うならば、チェンバログループの方々に

よる毎週のミニコンサート、月1、2回のコンサートにもほとんど参加もせず、談話会で我々、ボランティアのために演奏会をして欲しいなど、勝手なお願いに対して応えてくれたチェンバログループの方々には感謝をしなければなりません。

さすがに、グラスを手に鑑賞をという訳にはいかなかったですが、演奏会に続く新年会で、名曲を名演奏で鑑賞した余韻の中でグラスを傾けることが出来、至福の時を過ごすことが出来ました。



演奏風景

博物館訪問記

第8回 博物館に押しかけよう 弥永北海道博物館訪問記

北大の歴史ボランティア 石川満寿夫

皆さん弥永北海道博物館って御存知ですか。小生は今回の訪問まで名前さえ知りませんでした。2012年2月18日(土)午後にボランティアメンバー11名にて訪問。北19条西4丁目に位置し、北大構内から最も近い博物館、雪の舞う中、立看板がなければ通り過ぎてしまうようなやや大きめの個人の住宅風の建物であります。玄関を入ると、太古の扉を開けるが如く、化石には浅学なる自分にもただならぬ雰囲気展示の迫りに圧倒されました。

弥永芳子館長が登場、博物館設立の由来、収集苦心話などを熱く語り始めた言葉は93歳とは思えない若々しき情熱と今も追い求める迫力がありました。興味から研究を始めて50年余り、鉱物・化石、アイヌ民族資料、貨幣資料、砂金・砂白金資料、国内外の黄金工芸品などに及んでいます。公的運営助成もなく個人の資力からなる私設博物館であります。単なるコレクターではなく、歴史的背景にも興味を持ち収集し、北海道に所縁のある現有展示は1万

数千点、他に6万点以上の所蔵品があるとのこと。3階まで及ぶ展示コーナーに所狭しと陳列され、千両箱の重量実感や砂場での砂金・金属探知機体験など館長の展示への創意工夫が滲み出ていました。館長の話は津軽海峡の動物的分布境界線を指摘したトーマス・ブラキストンが函館金森倉庫の興隆に資金支援したこと、函館で貿易実業家、死の商人とも言われる柳田藤吉を諫めた逸話、深川市鷹泊の砂白金採掘現場での強制労働実態などにも話は及びました。やはり大小を問わず博物館には、ただ展示を見ているだけではなく、その展示物の背景、時代考証、逸話などを紹介解説できる語り部の存在が必要であることを再認識しました。

鉱物・化石に精通する人には良く知られている弥永博物館、個人でよくぞここまでと思いながらも館長の想いを継承する後継者の存在が気になりつつ博物館を後にしました。



参加者一同
(中央の女性が弥永館長)

退任にあたって

この3月で、総合博物館の特任教授を退任されます、お二人の先生からボランティア活動に対する所感等をお寄せいただきました。なお、両先生とも、今後は博物館資料部研究員として、研究・指導を継続される予定です。

北大総合博物館特任教授 松枝大治 「石の上に50余年」

今年3月末をもって現役を退くに当たり何を書いたら良いか迷ったが、去来する自分とこれまでの石との関わりと今後のことに思いを巡らせている状況をしたためる事にした。

先日の土曜市民セミナーでは、しばしばつまらないものの例えとして使われる“石”の話をした。思い出してみると、自分がこの“石”の世界に踏み込んだきっかけは定かではないが、小学5年生頃に同級生らと近くの山に眼を輝かせながら水晶を取りに行ったことかもしれない。それ以来50余年が経ったことになる。その後、中学校時代にあるきっかけで登山が趣味となり、その折々に登山道で様々な岩石と触れ合うことになった。

昭和41(1966)年に九州大学理学部地質学科に入学したが、この学科を選択した主な理由は、戦後ベビーブームに生まれ育った世代の我々にとって1学年の学生定員10名、教官が25名という、当時は当たり前だったマスプロ教育とは著しく異なる環境に加え、単に室内に閉じこもり頭でっかちとならず登山も含めてフィールドワークが出来ることも大きな魅力であったからである。入学後は、専門課程に入る前の教養部で地学部所属し、先輩・後輩部員と共に始終野外へ鉱物・岩石採集に出かけ、専門課程に入る前から次第に専門の素養が身に付いて行った事も確かである。専門課程進学後は、3年生の進級論文で島根県益田市都茂鉱山周辺の地質調査が研究課題となり、そこで産出した多様なスカルン鉱物やペグマタイト鉱物に魅せられ、卒業論文から大学院博士課程に至るまで鉱物学・鉱床学の研究にのめりこむことになった。この間に運良く複数の新鉱物発見や最年少での鉱物学会奨励賞受賞などの機会に恵まれることになった(詳細な経緯は近日発行の博物館ニュースに掲

載)。博士課程終了後は縁があり、昭和51(1976)年から秋田大学鉱山学部鉱山地質学科に職を得たが、その在任期間中に第23次南極観測夏隊(地学)として南極の約30億年前の岩石の上に立ち、さらには米国モンタナ州モンタナ鉱物工学大学(故マンズフィールド駐日大使の母校)の交換教授としての米国滞在中に北米の様々な岩石・鉱物や研究者との出会いもあった。昭和63年から北大理学部地質学鉱物学科(後に地球惑星科学科に名称変更)に助教授として転任後、平成11年に北大に総合博物館が設置された機会に現職となった。この間、自らの教育研究に関わり世界各国を訪問する機会を得て、我が国とは異なる種々の岩石・鉱物との巡り合いやそれらを用いた教育研究、展示を始めとする各種博物館活動に携わる得難い貴重な経験をした。

石の上に50余年、自分自身にとって色々な意味でこれからも“石”との触れ合いが数多くあると思うが、微力ながら今後も総合博物館での標本の整理収蔵、それらを用いた新たな研究展開や教育普及、展示活動等に資料部研究員の立場で側面からお手伝いできれば幸いである。しばしば研究者の世界では、自らの研究を「知的好奇心を満たすため」という言い方をする向きもあるが、学問は何らかの意味で常に「世の中の役に立つ学問」を意識しておく必要があると常々信じて来た。詳しいことは省くが、博物館の果たす役割はこの意味で極めて重要な存在意義があり、館内外の多くの人々にもそのことを是非意識して欲しいと思っている。またその使命を果たして行く上で、博物館ボランティアの方々の存在と支援は大変大きな意味があり、これまでのご協力で改めて心から深く感謝すると共に、今後も当館のさらなる発展のために是非引き続きご理解とご支援を頂きたいと願っている。

最後になるが、前述したこの世界に足を踏み入れたきっかけとなった趣味の登山では、ひたすら山頂を目指すあまり、周囲の景色を十分楽しむ余裕も少なかった感がある。まだまだこれからも上り下りはあると思うが、一区切りが付き折り返し点に達した現在、これか

らは時折自分が目指した高みを振り返り、一方で眼下の景色を楽しみつつ、改めて“石”との一期一会の出会いに期待に胸を膨らませながら、あわてずゆるやかに坂道を歩いて下って行きたいと考えている今日この頃である。

北大総合博物館特任教授 天野哲也

1. 考古学

1999年の開館以来13年間、考古学分野では20人余りのボランティアの方々が活動されてきました。初期のころには、文学部から移管した資料の収納整備、つづく125周年記念常設展示の制作、そして2003年に医学研究科から委託されたオホーツク人骨等の点検整備で活動していただいています。また鉄器パラタクソノミスト講座のテキスト作成にも参加していただきました。

当館ではどこの分野も専任は教員一人きりで、膨大な資料を抱え、その中で研究はもちろんのこと教育や展示さらに館の運営にもかかわっています。まさに猫の手も借りたいくらいの忙しさです。ましてや人の手です。

考古学に強い関心をもち、博物館の状況をよく理解して、その条件の中で自己の考古学的理解を仲間と一緒に深めて行く活動にさらに多くの方々が加

わることを期待します。

2. 図書

研究機関でもある博物館では、標本・資料に基づいた研究が日々進められています。その活動のためには、これまでに蓄積されてきた研究成果の検討・検証が不可欠です。論文や図書などを収蔵した博物館図書室はこの研究成果の宝庫です。ちなみに2012年1月7日時点の蔵書数は、和書5,865点、洋書2,385点、和雑誌455種類、洋雑誌208種類です。

この間、図書ボランティアのみなさんの活躍によってデューイ10進法分類・配架を貫徹した結果、格段に利用しやすくなりました。また、所蔵図書はすべて登録・公開されているために館外・学外の利用も少なくありません。専任の司書の配置が強く望まれます。



市民セミナー(2012年2月11日)で講演される
松枝先生(左)と天野先生(右)

* 3月3日より5月6日まで3階企画展示室で「クラーク博士と札幌の植物」が開催されています。すでに皆様にはEメールで展示室の担当ボランティア募集のお願いが博物館から届いているかと思えます。ご協力、よろしくお願い致します。調整担当は研究支援推進員の草嶋さんです。連絡お待ちしております。

* ニュース原稿の寄稿、また談話会、見学会などの企画に際して、皆様のご意見、アイデアお待ちしております。

* ボランティア・ニュースは博物館のホームページからもご覧になれます。<http://www.museum.hokudai.ac.jp>



ボランティア・ニュース

◆編集・発行

北海道大学総合博物館ボランティアの会
(担当者:星野、沼田、永山、安田、石川)

◆発行日:2012年3月1日

◆連絡先

〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
Tel: 011-706-4706